



まさか広野町に 津波が来るとは思わなかった

ねもと くに えい
根本 邦衛 さん
(自宅で被災)

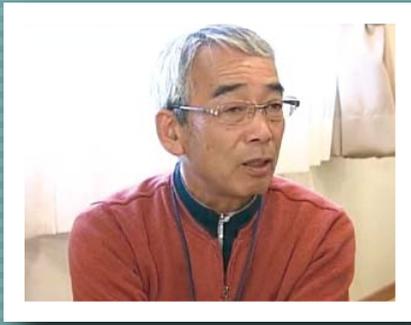
平成23年3月11日午後、私の記憶にない最初の大地震が発生しました。町内に住む妻の母が町内の診療所に通院していましたので、迎えにいてみると玄関のガラス戸はめちゃくちゃに壊れ、無人となっていました。義母は知人の車で送ってもらい無事帰っていたのですが、私は町の高台に避難したかとも思い、高台にある公民館、総合グラウンドなどへ探しに行ったその時です。高台から見える海岸線に向かって想像もできない大津波が押し寄せてくるのが見えました。多分、津波の第2波、第3波だったと思います。

私が怖いもの見たさにJR常磐線桜田こ道橋をくぐり抜けて見た光景は、常磐線と海岸の間にあった広い田畑や家屋敷は完全に海に化けており、自然の凄まじさと恐ろしさを感じました。広野町に70年以上住んできたなかで、まさかわが町にこのような大津波が来襲するとは、考えたこともありませんでした。わが家は特段の被害もなく、電気、上下水道とも無事でしたが、翌12日に町の防災行政無線で南西の方向に逃げるよう放送があり、家族はその日いわき市の親せき宅へ避難しました。

それは福島第一原発事故による放射線の影響があるかもしれないからだということ、後に知りました。

翌15日、娘と孫は横浜市へ避難しましたが、私は小野町の避難所へ行こうと思いましたが、その日もいわき市に残りました。しかし、車の燃料がカラカラで身動きが取れませんでした。そのような状況の中、翌16日の未明、息子の大学時代の同級生が千葉市から60リットルのガソリンを持ってきてくれ、無事小野町へ避難することができました。避難所は小野町の体育館で、既に多くの町民が避難していました。体育館での生活は、夜から朝にかけてストーブの火を消さねばならず、大変寒かったです。食事はパン食、スープ、カップ麺が多く、中には賞味期限切れのものもありました。一時感染症も発生しました。そのようななか、その月の20日、小野町の配慮により町の第3セクターの施設で久しぶりの風呂に入れたときは、本当にありがたかったです。

翌月4月9日に二次避難所である石川町母畑温泉の八幡屋に移りました。石川町での生活では地元の皆さんと会話をしたり、お茶をごちそうになったりと感謝しています。その年の8月28日にいわき市常磐迎第一応急仮設住宅に移りました。いわき市の生活では、車にペンキを塗られるトラブルなど残念なこともありましたが、いわき市の皆さんには石川町の皆さん同様、お世話になっているという気持ちでいっぱいです。



一番悔しいのは、 元の生活を取り戻せないこと

ねもと まさひと
根本 賢仁 さん
(自宅近くで被災)

大地震のあと自宅を確認すると、ぐし瓦(棟瓦)が落ちていました。余震が続いていたので、家の中にいない方がいいと判断し、財布と車のキーだけ取りに入り、避難場所の下浅見川集会所に車を移しました。

ワンセグで宮城県の津波第1波の映像を観ました。そののち「津波が来ます、大津波が来ます」という防災無線が流れました。

孫を迎えに保育所へ向かおうとしたところ、海岸線に津波がぶち当たって10メートルくらいの波しぶきがびょうぶのように立ちました。

すぐに海岸の近くを離れるべきだと思い、高台の方へ逃げると、町の人たちも大勢逃げてきました。築地ヶ丘体育館(広野中学校体育館)のところまで上がると、海の方を見ている人がたくさんいたので、私も車を止めて海の方を見ました。すると私の家の前の久保地区の住宅が、津波の引き潮で流されていきました。自宅は平屋で、津波で浸水しましたが、建物は全部残っ

ていました。その晩は、町内の旅館に部屋を借りました。

地震の1か月くらい後、地元・久保本町地区にある鹿島神社の津波被害状況を確認し、浜下り神事に関わるものをすべて集めました。文化財を残す手立てを考えましたが、宗教法人に関わることなので国や自治体の財政支援が得られず、地区で神事を行うため集めてあったお金で応急措置をしました。津波で流された鳥居についても、今後は個人の家で葬儀はしないだろうということで、地区の葬儀組合のお金で工面しました。

この地区には、昔使っていたいろいろな道具などが残っていましたが、全・半壊建物の取り壊しでなくなってしまい、蔵の中には明治初めころの教科書などもありましたが、全部捨てました。文化的なものは、今回の津波被災で全部葬られたと感じています。

何と言っても一番悔しいことは、元の生活を取り戻せないことの一点に尽きます。



妻の誕生日に ろうそくの明かりで食事

ねもと まもる
根本 衛さん
(広野町内で被災)

震災当日は休日、娯楽施設でリフレッシュしていました。地震発生時店内では数人が遊技を楽しんでいて、揺れと同時に外へ駆け出しましたが、私は室内の方が安全だと考え店内にとどまりました。揺れが収まり外に出たところ、駐車場は地盤が沈下していました。これは大変だと思って車で家に帰ろうとしましたが、6号国道は北迫川付近で地盤沈下を起こしており車が渋滞、全然動く気配はありません。旧6号線を通って家路につきましたが、道路沿いのブロックは傾斜または崩れ落ちている状態であり、揺れの大きさに驚愕しました。家に帰ると妻が棚から落ちた食器などの片付けをしており、私がおの手伝いをしている中でも余震は続き、寒い中でも出入り口を開放し、いつでも外に出られる態勢で一夜を過ごしました。

私は、いわき市小名浜にある娘宅に避難しました（一時的に茨城県にある妻の実家にいたこともあります）。幾度か余震はありましたが、ひと月は大した揺れもありませんでした。

4月11日は妻の誕生日のため、夕方5人で外出に出向き2階に通され雑談していたところ、突然大きな揺れに襲われました。急いで階段を降りると、店員から津波の恐れがあるので営業を中止すると言われました。やむなく店を出たところ、町の電気

は消え、車が渋滞して通常5分程度で着く娘宅に帰るのに、1時間を要しました。近くのコンビニで弁当を買うつもりでしたが、ろうそくをつけて営業している店でも食品はほとんど売り切れていて、残り物を買ってろうそくの明かりの中で誕生日を祝いました。孫たちはクリスマスのようなだと笑っていましたが、このような日は二度と来ないよう願いたいものです。

7月9日にいわき市中央台高久第四応急仮設住宅に入居できました。応急仮設住宅には、連日各種団体や個人ボランティアの人たちが訪れ、生活物資の支援、心身のケアサービスをしていただき、感謝の気持ちでいっぱいでした。長い仮設住宅生活をしている中で、絆の意味を私なりに解釈すれば、1本の糸を互いに持ち合い、引いたり引かれたりしながら助け合うことなのだと思います。原発事故や大震災によりおの心の疲労を持って生活しています。私たちは、原発事故の被害者であることは言うまでもありませんが、今町民一人ひとりが何をすべきなのか考え、国や自治体に頼るだけでなく、負の生活をゼロに、また正にする努力が必要だと思います。



震災直後、 町はゴーストタウンになった

ねもと やすのり
根本 安知 さん
(元警戒パトロール員)

平成23年3月11日は、妻と町内の根本医院へ行った時に最初の地震が発生しました。診療所に入るとすぐに携帯電話の緊急地震速報が鳴り、切るやいなや地震が来ました。すぐに表に出て車に乗りました。駐車場も建物もユサユサ揺れました。

翌12日の午後2時ごろ、できるだけ遠く、南か西の方に避難するよう防災無線が流れました。いわき三和インター方面を目指し、この日は福島空港まで行き駐車場で車中泊しました。認知症のある母は、事の成り行きが飲み込めず、帰ろうと言うばかりでした。空港では離発着する自衛隊のヘリコプターや空港のスピーカーから、利用者以外は駐車場を出るよう呼びかけがありましたが、無視しました。車のラジオで楢葉町や浪江町の避難情報を聞きましたが、広野町の情報は聞けませんでした。

そのあと、平田村の避難所で親せきと合流して15人になり、日立市の親せき紹介のアパートやいわき市内郷綴町に移り住んだ後、家族4人でいわき市の借り上げ住宅

に落ち着きました。その後、2度、3度を含む避難生活の中、母の病状が悪化し、同年7月に入院することになってしまいました。

双葉警察署の防犯指導隊を委嘱されていた関係で、広野町に泥棒が入っているという情報が入りました。同年5月に指導隊の仲間と協議して、町にボランティアを申し出ましたが、最初は町の消防団が消防車で巡回しました。同年7月10日に県の事業として認められ、3直交代制で行いました。

実際に回ってみて、まさにゴーストタウンだと思いました。最初は夜電気の点いている家がなく真っ暗で、だんだんあちこちで電気が点くようになりました。活動前は4か月で70件くらいの盗難があったため、他県ナンバーの不審車は必ず警察に連絡して照会してもらいました。活動を始めてからは被害が激減しました。私は平成25年1月で辞めましたが、現在も警戒パトロール隊の活動は続いています。



広野町に縁があった

はせがわ あきひろ
長谷川 明弘 さん

(三郷市派遣職員(平成23年12月~25年3月))

私が広野町に赴任したのは平成23年12月で、当時は役場機能がいわき市の湯本支所にありました。原発事故の起きた年でしたが、父方の実家がいわき市にあり、浜通りの状況を知っていたので、赴任することについて抵抗感はありませんでした。広野町に「縁」があったのだと思います。

来てみて、まず職員数が少ないのに驚きました。行政の仕事は、人口が少なくてもやることは一緒なので、当時病気で倒れた職員も少なくなかったなかで、派遣職員の自分が広野町の元からいる職員よりも先に倒れてはいけないと思いました。

ただ、どれだけ健康管理に気をつけていても、狭い湯本支所では職員がほぼ同時期に風邪をひいてしまい、職員といえども生身の人間であることを自覚しました。

広野町では教育委員会事務局で学校施設の復旧業務などを担当しましたが、湯本支所から広野町の学校施設までは高速道路利用で40キロメートル離れており、現場に出るときは1日仕事でした。また、復旧工事は除染作業と並行して進める必要があり、調整に苦労しました。平成24年3月

に役場機能が広野町に戻ってからは、朝6時起きで湯本の宿舎から通いました。当初4か月間だった派遣期間は、平成25年3月まで1年間延長され、腰を据えて仕事をしました。

平成24年度の2学期から元の校舎で広野小学校と広野中学校を再開する目標を立てていましたが、目の前の仕事よりも国・県との折衝、予算編成・議決、契約という工程を組むのが一番大変でした。一つでも工程がずれたら2学期に間に合わないというギリギリの状況でしたが、ほかの部署や業者の皆さんの協力のおかげで、8月27日の始業式を迎えることができました。

個人的な感覚としてほぼ奇跡的だったと感じています。後日その記事を新聞で読んだとき、自分の役目の一つ果たせたと思い、感慨深いものがありました。

広野町は三郷市にとって災害時相互応援協定の相手であり、なくてはならない存在です。私は、三郷市に戻ってからも広野町のことをずっと気にかけていますし、今でも来てくれと言われたら、いつでも飛んでいきます。



避難指示はもっとはっきりと 伝えてほしかった

ふる いち つよし
古市 強 さん
(自宅で被災)

平成23年3月11日は、自宅でテレビを
観ているときに地震が来たので、消して表
に出ました。揺れがいったん収まった後、
壊れた家の中を片付けました。海辺に住む
親せきが家に来て津波が来たと教えてくれ
ましたので、海岸に行ってみたら引き潮
で流された後でした。停電していたので、
ろうそくの明かりで夕食を取りました。

翌日12日の防災無線は聞いていません。

13日の午後になって「避難用のバスを
出すので、町の児童館へ集合してくださ
い」という防災無線が聞こえました。行き
先は、南の方とか西の方とか言っていたよ
うな気がします。私は避難を強制されて
いないと受け取り、バスには乗りませ
んでした。ただ、自宅は電気や水が止ま
っていたため、その夜は町内の折木にあ
る親せきの家に泊まりました。その家の
家族は、広野町から避難していました。

翌日の14日はいわき市の親類宅に身を

寄せ、16日に娘がいる新潟県柏崎市へ自
分で車を運転していきました。ガソリンが
ないと、ノーマルタイヤだったので困り
ました。高速道路は断念して一般道で行き、
給油は柏崎市の人に会津坂下町までガソリ
ンを持ってきてもらいました。

娘のところといえども長居はできないと
実感したので、その年の9月に水道が再開
したのを機に、広野町に戻りました。妻は
避難生活で体重が10キログラムも減りま
した。

今思えば、町からの避難指示をもっとき
ちんとしてほしかったと、憤りを感じてい
ます。周りの人にも、はっきりと伝わらな
かったと言う人がいます。町の執行部と町
議会は、国、福島県および東京電力株式会
社からの情報はどう入って、町は町民へど
う伝えたのか具体的に検証し、今後の防災
に生かすよう提案します。